

ソロマリimba奏者布谷史人さん

「音楽家に聴く」というコーナーは、普段舞台上で音楽を奏でているプロの皆さんに舞台を下りて言葉で語ってもらうコーナーです。今回はアメリカ・ボストンでソロマリimba奏者として活躍中の布谷史人（ヌノヤフミト）さんをゲストにインタビューさせていただきます。「音楽留学」をテーマにお話しを伺ってみたいと思います。（インタビュー：2006年11月） - 布谷史人さんプロフィール -



秋田県生まれ。山形大学教育学部総合教育課程音楽文化コースを経て、ボストン音楽院修士課程マリimba・パフォーマンス科修了。アーティスト・ディプロマ科マリimba専攻修了。ボストン音楽院でナンシー・ゼルトツマン、パトリック・ホーレンベルクに師事。その他、岡田知之、目黒一則、須藤八汐、三村奈々恵、池上英樹の各氏に師事。Ima Hogg 若手音楽家のためのコンクール（テキサス州ヒューストン）1位。世界マリimbaコンクール（ドイツ）、The National Young Artist Competition（テキサス州オデッサ）、The Eastern Connecticut Symphony Young Artist Competition（コネチカット州ニュー・ロンドン）、Percussive Arts Society国際マリimbaコンクール（アメリカ）等で入賞。大曲新人音楽祭コンクール、クラシック音楽コンクール・打楽器部門最高位（日本）。ヒューストン交響楽団、Di Pepercussio Ensemble、東方コネチカット交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団と共演。現在ボストン在住。

簡単な略歴を教えてくださいませんか？ 布谷 7歳からピアノを始めました。小学校の時に学園祭でマリimbaを初めて見たのですが、それ以来マリimbaに憧れがありましたね。その後、中学校からずっと打楽器をやり、17歳からマリimbaを本格的に勉強しています。

その後はマリimbaだけをお続けになっているのですか？ 布谷 大学は音楽大学ではなく、教育科のある山形大学に行ったのですが、その時は打楽器も勉強しなければいけなかったため、打楽器もマリimbaも両方均等にやっていました。アメリカの学校ではマリimba科がありそこに入学したので、留学後はマリimbaを主に勉強しました。

アメリカに留学しようと思ったきっかけはありますか？



布谷 留学というか、マリimbaを勉強する引き金になった先生（大学2年頃から学外で習っていたピアノの先生）がいるんです。山形大学のカリキュラムでは、打楽器専門の先生が年に4回しか来ません。それだけだとあまりにもレッスン数が少ないと感じたので、大学2年の終わり頃に思い切ってそのピアノの先生にマリimbaを教えてくださいとお願いしたんです。先生はそれを快く引き受けて下さいました。そこからは常に新しいものの発見でした。音楽というもの、音楽をすることの喜び、苦しみ、深さ。本当にいろいろなものを学びました。その先生との出会いで、真剣に音楽を勉強しようと思ったと言っても過言ではないですね。そしてマリimbaの世界に目を向けるために、世界で活躍している何人かのマリimba奏者に出会う機会があり、その方々から色々海外のお話を聞いていくうちに、海外に興味を持ち始めました。アメリカやヨーロッパ、アメリカの中でも西側、東側がありますが、ボストンに留学先を決めた理由は何かありますか？布谷 ヨーロッパでは、オーケストラ奏者になるためのプログラムが主流で、ソロでマリimbaのみを勉強することはまず不可能だと聞きました。自分としてはマリimbaのみを勉強したかったので、大学3年生頃からお世話になっていた三村奈々恵さん（注：マリimba奏者）からお話をいろいろ聞き、マリimba専攻で修士課程が取れる大学ということで、三村さんが通っていたボストン音楽院に行こうと、大学4年の夏に急に考え始めました。ボストン音楽院に行かれてどうでしたか？布谷 アメリカ留学を急に決めたので、英語を準備する時間はほとんどありませんでした。最初は英語が全然出来なかったで、英語の授業から受講しました。その英語のクラスでは、いろいろな国の人と友達になり、ボストン探索をしたり、協力したり、毎日いろいろな発見があって楽しかったです。プライベートレッスンは、英語があまり達者でない留学生を教えるのに慣れている先生でしたので、英語が出来なくても身振り手振り簡単な単語で何とか教えてくれました。ボストン音楽院は、入学時にTOEFLは必要ですか？布谷 僕はスコア自体を持っていましたが、恥ずかしながら入学するための点数には達していませんでした。多分、その当時はそんなに重要視されていなかったのだと思います。今は必要みたいですね。オーディションはテープですか？布谷 テープでもいいし、もちろんライブオーディションでも良かったです。僕はあまりよく分からなかったでテープで出しました。ただ、自分の担当になる予定の先生に自分の事を知られていないのであれば、直接来てオーディションを受けたほうがいい印象を与えられると思います。奨学金の額も変わってくると思います。初年度から奨学金はもらえますか？布谷 優れている人には多少なりともちゃんとくれます。ただ、奨学金は主にオーケストラの楽器の専攻生に多く振り分けられるので、マリimba専攻生は高額な奨学金をもらうのは難しいと聞きました。僕の場合、修士課程の時は多少もらっており、その後のアーティスト・ディプロマでは全額奨学金を得ることができました。マリimba科は何人いたのですか？布谷 修士課程は、三～四名です。学校自体がそんなに大きくはないので三～四人でも結構多いほうだと思います。ボストンは、治安などがどうですか？布谷 場所によってですが、アメリカでは比較的良好いほうだと思います。何区域が危ない聞いています。危ない区域は決まっているのでそこに行かない限り大丈夫だと思います。



音楽をアメリカで勉強することで良い点・悪い点はどのような事がありますか？布谷 アメリカは、国自体が本当に自由だと思うんです。いろいろな人がいるし、いろいろな演奏方法もあるし、いろいろな音楽もある。それが刺激になっていいなと思います。逆にいろいろありすぎて広く浅くになりがちなのもあるような気もしますね。ただ、ボストンやニューヨークなどの東海岸側は、地理的にもヨーロッパに近く、たくさんの音楽家がヨーロッパから渡ってきます。そのおかげで、クラシックの本場の音楽を聴く機会もありますし、クラシックの勉強を本場の人から習う事も可能だと思います。そして、マリimbaという楽器自体が珍しく、アメリカは珍しいものが好きなのがあるので、作曲専攻の生徒や作曲家の先生方がマリimbaを使った室内楽曲やソロの曲を書いてくれますね。その曲を演奏するチャンスがありますし、マリimbaの作品を書いてくれる作曲家の方と、マリimbaの可能性や、その作曲家の書いた曲の意図等のお話をする機会がありますね。アメリカでもマリimbaはあまり知られていないのですか？布谷 そうですね。演奏会をすると「今までマリimbaを聴いたことがなかった」という人はたくさんいます。コンサートマリimbaの歴史は浅いので、仕方がないと思いますが、でも、中にはマリimbaをジャズで聞いた事があるとか、昔メキシコで聞いたとか、そういう人がいて僕も驚くことがあります。アメリカに留学されて一番大事な事はなんですか？布谷 目標みたいなものはしっかり持って勉強に励む事が大事だと思います。そして、留学は親等からの金銭的・精神的サポートが必ず必要だと思いますので、そのサポートをしていてくれる方々への感謝の気持ちも忘れてはいけませんよね。また、ボストンは日本人が多いので、日本人と

かり遊んだりせず、いろいろな人と交流を持っていろいろな文化や経験をしていく事も大事なかなと思います。 学校を卒業後、アメリカでいろいろな仕事をなさっていると思いますが、アメリカで仕事をする上で日本人に有利な点・不利な点があるとお考えですか？布谷 それはまだ、感じたことはないです。ただ英語がアメリカ人みたいに流暢に話せないことが不利というか、思ったことがすぐに英語に出てこないことがストレスになることはありますけどね。 東海岸、西海岸の都市部では、言葉がある程度できれば、あとは実力で仕事をもぎ取っていけるという事ですね？布谷 そうだと思います。 クラシック音楽というのは、布谷さんにとって何ですか？布谷 自分と向き合う鏡みたいなものですね。音も音楽性も感受性もほとんど人間性から来るものだと思います。人間性を磨いてこそ音楽が高まっていくとも思います。音楽は心のよりどころですね。 そのときの自分の状況が音に反映されるという事ですか？布谷 ほとんどそうだと思います。 ロックとかポップとかそういうジャンルには興味が無いのですか？布谷 そういうジャンルの影響を受けて作られたマリンバの作品がありますので、そういうのは何曲か演奏したことがあります。でも、そういう音楽は、自分は聞くほうが好きですね。あとは、ジャズを六ヶ月くらい勉強した事があります。でも、何かしっくりこなかったですね。クラシックの演奏とジャズの演奏とは頭の使い方が全然違うので、今からもう一度一からジャズを勉強するよりは、今はクラシックの方に時間を費やしたいと思っています。でも余裕が出てきたら、いつかはちゃんとジャズを勉強したいと思っています。



今後の音楽的な夢があれば教えていただいてもよろしいですか？布谷 マリンバでクラシック音楽を演奏することがまだあまり世に浸透していないので、まずマリンバという楽器があることを世の中に確立して、その上で、マリンバで奏でる音楽、そしてその良さを世間に広めていきたいと思っています。曲も、マリンバのオリジナル作品はまだそれほどありませんので、僕が尊敬する作曲家の先生に委嘱していき、後世に残せる作品も作って行きたいですね。そしてマリンバで奏でる僕の音楽を通して、いろいろな人がいろいろなことを考えられるような、感じられるような、深い音楽を創って行きたいと思っています。ピアノやヴァイオリン奏者の方は、そのような演奏をされる方はたくさんいますが、要するに音で勝負できる音楽家になりたいということです。最近、マリンバの演奏自体がエンターテイメントになりがちなのが多いと思いますので。 エンターテイメント的というのは？布谷 奏者がマリンバから出る音をよく聴かずに、体の動きのみを考えて演奏する事です。それがいいと思ってやっている人はもちろんいいと思うのです。マリンバを演奏する事は、やはり動きを伴いますし、そういう体の動きに自分の思考が動いてしまうことは仕方がないと思うのです。でも僕は「動き」を第一に考えた音楽ではなくて、自分の奏でるマリンバの音に対してもっと敏感に耳を働かせてよく聴き、作曲家の書いた音符を深く追求して、その作曲家の意図を理解し音楽を創っていけるような音楽家、マリンバ奏者になりたいと思っています。 アクションっぽくなる、見られがちということですか？布谷 そうですね。「見ていて綺麗だね」とか「手が早く動いて凄いな」と言われるよりは「音楽が深いね」と言われるほうが嬉しいですね。でも実際問題、マリンバを演奏することには大きな動きが伴うので、難しいですけどね。 マリンバの演奏は、ソロとオーケストラの両方になりますか？布谷 オーケストラの中でマリンバを演奏する事もあるのですが、それはオーケストラの打楽器奏者がマリンバを演奏することになります。マリンバ奏者がそのような仕事に雇ってもらえる事は稀ではないでしょうか。マリンバ奏者は、主にソロのコンサート、ソリストとしてオーケストラをバックに演奏、室内楽で演奏、BGMで弾く、レセプションで演奏することがほとんどだと思います。 マリンバというのはいつ頃から登場した楽器なのですか？布谷 コンサート楽器としてある今日のマリンバの原型が登場してから80年くらいです。マリンバは、アフリカが起源だと言われているのですが、確かではありません。その起源と言われるアフリカのバラフォンという楽器が南アメリカのグアテマラやメキシコに渡り、すべて木で作られているマリンバが出来たのがマリンバの始まりと言われてますね。そして80年ほど前に、とあるアメリカの楽器会社はその南アメリカのマリンバを発見して、今のマリンバ(共鳴管が鉄製)の原型を作りました。そこからいろいろ楽器会社が開発して、今僕が使っているような5オクターブの楽器がおおよそ30年程前に出来ました。



布谷さんは、アメリカで演奏家として活躍されているわけですが、マリンバ奏者を目指す方がアメリカで音楽家として活躍する秘訣はありますか？布谷 まずは技術的にも音楽的にもあるレベルに達していることが必要だと思います。そして、人間的にも、音楽家としてもバランスが取れていることも大事だと思いますね。活躍する秘訣ですか・・・あったら自分も教えて欲しいくらいですね（笑）。マリンバ奏者として生きていくのは、引かれていないレールの上を歩くのとほぼ一緒と言っても過言では無いくらいですので、強い精神力で頑張っていかなければいけないと思います。それでご飯を食べていかなければいけないですし、生きるためにお金をどうやって稼ぐか考えていかなければいけません。でもお金の事だけを考えていては、良い音楽は創れません。だからといって家にこもって練習ばかりしていたって、ご飯は食べられませんし・・・。そのバランスも難しいですよ。自分の優れているところを見つけて「自分はこういう事が出来るんだ、こんなことをしてきたんだ」と、アピールしていくことが大切だとも思いますね。

アピールの仕方はどういうふうになされましたか？布谷 一番いいのは演奏をたくさんの人に聞いてもらうことだと思います。演奏を聞いてもらう上で履歴書が印象的だと良いと思いますので、コンクールで賞に入っているとか、自分にしかないレパトリー・プロジェクトがあるとか、そういうものを全面的にアピールしていくといいと思います。アメリカと日本では人のつながりが少し違いますね。

どういう意味ですか？布谷 日本の場合、横のつながり（師弟関係）で仕事を頂く事が多いと思うのです。そのつながりが無いと仕事が出来ないという話も聞いた事があります。アメリカでももちろん先生のツテでお仕事をいただくという事もあるのですが、日本ほど師弟関係の有無で厳しい思いをすることは無いと思います。アメリカの場合は、知らない誰かが「いいな」と思ったら、その人と少し話をしてだけで、「僕の息子の結婚式で演奏してくれる音楽家を探していたところなのだけど、君の連絡先を教えてくださいませんか」と話をしてくれたり、「君の経歴、面白いこと書いているね」と興味をもって話しかけてくれる人などがいます。コンクールで多数の入賞経験があるとコンサートを運営しているグループから演奏会の依頼があったりします。面識の無かった作曲家の先生でも演奏を気に入ってくると「君のためにマリンバの曲を書きたいのだけど」と言ってくれる方もいましたね。本当にいろいろなチャンスがアメリカには転がっている気がします。ですので、たくさんの方に演奏を聞いてもらう事が一番大事だと思います。

コネクションがなくても実力次第で、仕事のチャンスが生まれてくる可能性があるのです。布谷 あると思います。だから僕もここにいれると思うのです。海外に音楽留学をしたい方が日本にはたくさんいらっしゃいます。そういう方にアドバイスをいただけますか？



布谷 海外留学は、人生経験にもなりますし、自分を知ることが出来る良い機会だと思います。ただ先程も言いましたが、留学をする事は精神的にも金銭的にも大変ですし、それをサポートしてくれる人たちに対して感謝することを忘れず、一生懸命死ぬ気で頑張ってもらいたいと思います。日本人は他の国の方に比べて金銭的に恵まれていると思います。恵まれているからこそだと思うのですが、「海外にいる」というステータスに満足して、遊んで終わったり、音楽留学で来ているはずなのに語学をちょっと勉強して帰国する、という方がいるので、そういうことのないようにしてほしいと思います。アメリカにいる日本人がそういう目で見られるのは恥ずかしいと思いますので。もちろん死ぬ気で頑張れとは言ったのですが、息抜きも大事ですよ。自然を見たり、美術館に行ったり、映画を観たり、美味しいものを食べたり…。ストレス発散のためにパーッと遊ぶことも大事だと思います。また、アメリカでは一つの観念が通用しないことも多いので、頑固に物事を一つの側面から捉えず、何事に対しても受け入れられるような寛大な気持ちを持つ事が大事だと思います。アメリカは、日本で常識なことが常識でなかったりする国です。最初は、びっくりするかもしれないし、ストレスになるかもしれないのですがそれも世間勉強ですのでしっかり受け入れる用意が必要だと思います。 いろいろとありがとうございました。布谷 ありがとうございます。布谷さんによるアンドビジョ特別音楽留学プログラムはこちら？